文楽 Bunraku News 応援団通信

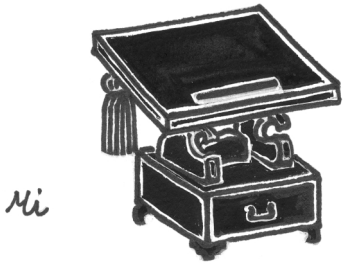
文楽
応援団通信
第９号
2006. 7. 21.

「夫婦善哉（めおとぜんざい）」

文楽応援団の自己紹介

文楽応援団は文楽の普及･振興を目的とするボランティアのグループです
おもな活動内容は

①文楽公演のポスター･ちらしを配布
②文楽関係の展示品の解説
③観劇のグループに公演のあらすじや見どころ聞きどころを解説
④劇場外での普及活動 (文楽の楽しみ方などを解説) 等々です
この他、文楽に関する学習会や懇親会なども行います



お問い合わせは下記へ
〒542-0073大阪市中央区日本橋1-12-10
国立文楽劇場 事業推進課 文楽応援団担当
TEL 06 (6212) 2531(代)　FAX 06 (6212) 1202

文楽応援団に寄せる熱い思い

国立文楽劇場支配人　石塚　禎一

私が東京から大阪へ赴任してまず最初の仕事は、文楽公演初日の４月１日、登録された文楽応援団の皆さんにボランティア登録証を渡す伝達式からスタートしました。

文楽応援団の皆さんは「元気ですよ」「パワフルですよ」「騒がしいですよ」との前評判どおり会場では皆さんの生き生きとした熱気が伝わり、私自身も伝達式に立ち会い皆さんからパワーをもらい爽快な気分でした。

思えば私が大阪へ一度目の赴任した翌年の平成８年３月に、文楽劇場１階展示室に文楽の普及コーナーが併設されました。ここでは、誰でもが自由に簡易な文楽関係図書、雑誌を閲覧できるよう整備されたのですが、今では円滑に管理運営されている普及コーナーも開設時には、劇場周辺地区の良いとはいえない環境から、安全面で不安を抱く意見が多く、ようやく開設されたことが印象的です。

現在の文楽応援団の活動状況の中でも、文楽の公演期間中に合わせて文楽普及コーナーや展示室に皆さんが常時待機してくださり資料展示の解説等の活動されること、文楽の普及イベントへの応援や協力をされていることは私共にとって大きな助けとなっており、大変心強くいつも感謝の気持でいっぱいです。

大阪の地域に密着させて文楽をますます元気にすることが私共の仕事であり、皆さんも同じ気持ちであることと思います。

関西元気文化事業でも言われておりますが、人生の潤いを感ずるには、文化芸術は欠かせません。伝統芸能、文楽を特に若い人たちに見ていただくためにも文楽に寄せる熱い気持ちを持って日ごろ活動してくださる文楽応援団の協力が必要です。

文楽応援団の皆様の今後ますますのご活躍を心より願っております。

Mi

やっぱり文楽はやめられない！　其の五

「よみがえった櫛たち」

鬼歯・毛筋立て・際出し・鬢出しなどという言葉を聞いて「それは日本髪を結うときに使う櫛ね」とおこたえいただける方は少なくなっていると思うが、そんな結髪用の櫛類一式をもっていた私。

鬢付け油の染み込んだそれらは、かなり以前に明治三十年代生まれの伯母から貰ったものであるが、私としてはこのまま手元に置くより、どなたかに使っていただけないものかとずっと考え続けてきた。

その思いに急に可能性がひらけたのは、当劇場の「首部屋」見学をしていたときのことである。隣接する「床山部屋」で、私の持っている櫛の一つと同じものを使って人形の髪を梳かす男性の姿が目に入った。

そこで恐る恐る劇場側に打診をしてみると、「使ってくださる方がいらっしゃる」とのこと。

飛び立つ思いで櫛箱を持参すると、その方というのが若くて美しい女性の床山さんだったのである。そして、「人形の髪も人間用と同じ櫛類で結い上げるんですよ。昔のものは細工がしっかりしていて梳かしやすい」と解き櫛一本を取り上げながら話されるにこやかな表情にウェービーなロングヘアがよく似合う。

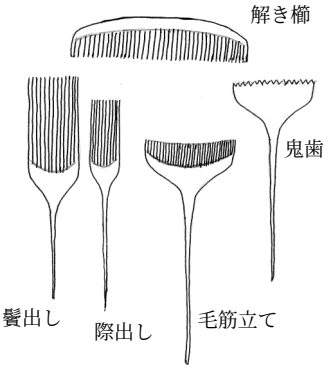
記念の写真を撮らせていただいたあと、案内してくださった方に驚きの感想を述べると、最初は関係者間でも主に男性がたずさわる裏方に女性が入ることへの若干の躊躇はあったらしいが、彼女の熱意と仕事の確かさで、今では床山部屋のチーフとしてご活躍中です。

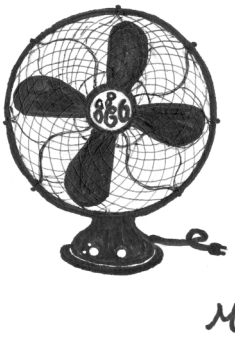
後日、記念写真にサインをお願いすると、山藤章二氏ばりの切れ味のいい自画像のイラストに「ＡＫＩＫＯ」の文字。

私の「櫛たち」が再び生かされる場を得た喜びに加えて、「ＡＫＩＫＯ」さんの存在が、伝統としきたりの世界・文楽のもう一つの側面として〝新しい風〟をも感じさせてくれたことも嬉しい。

やっぱり文楽はやめられない。

（文楽応援団　金岡純子）





わかりまっか　大阪ことば

「夫婦善哉より抜粋」

・はっさい
・ドテ焼き
・ヤトナ
・わや
・おちょぼ
・かめへん
・おこしやす
・あとがえらかった
・ぼんぼん
・あらへん
・あんじょう
・ほんま
・まいどおおけに
・べんちゃら
・さよか
・おいでやす
・よろしおまんな
・わて
・ぐつがわるい
・かんにん
・おなごし
・ぎょうさん
・かなわんさかい
・がたろ
・まむし
・しまつ

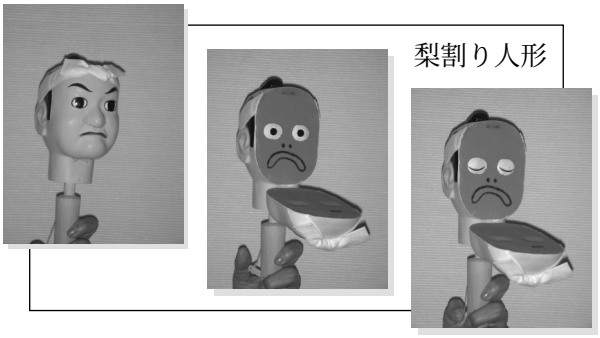
なまらんとしゃべれまっか！

「文ちゃん」「楽ちゃん」の情報コーナー

八号のお詫びと訂正

・「壺坂観音霊験記」の漢字が間違っていました。
・「心中重井筒」のルビ文字が間違っていました。
・『「日高川入相花王」道成寺公演を鑑賞して』の文中で〈翁・千歳の軽妙な躍動感のある動き・・・〉とありますが、〈三番叟の軽妙な躍動感のある・・・〉との表現の間違いでした。ここに深くお詫び申しあげます。

“中之島WEST交流イベント”に参加しました



梨割り人形

展示室の新しい仲間（梨割りの首）です

「伊賀越道中双六」竹藪の段　登場予定

Summer Highlights : *BUNRAKU & OSAKA*

This summer's highly unusual "modern" work ***Meoto Zenzai*** (first produced in 1956) paints a nostalgic picture of everyday life in the common classes of 1920s Osaka, with its distinctive local characters and dialect. Bunraku itself originated in Osaka, its golden age starting in 1703 with the love tragedy ***Sonezaki Shinju*** (Tokyo,Feb. 2005) by the great playwright Chikamatsu Monzaemon. This was based upon the recent double suicide of a young Osaka couple -- quite unlike the medieval military sagas from which puppet theatre had previously taken its stories -- and even used real personal and place names. It began a whole new genre of contemporary drama centering on Osaka's merchant classes with their financial and romantic woes, scandals and crimes.

This summer's ***Natsu Matsuri*** was inspired by an Osaka murder, as was the famous "oil shop murder" ***Onna Goroshi Abura no Jigoku*** (Tokyo, Sept. 2005).

So integral to the genre is the Osaka ambience that the highlight of a rare piece like ***Hiza Kurige*** (Osaka, Summer 2005) is said to be the narrators' rendition of the unusual Tokyo dialect. And everywhere in Osaka today is witness to the scenes the plays depict. The route of the Sonezaki lovers' final walk can still be traced in Umeda: from the stone marking where the Sonezaki River once ran, to the tourist-friendly Ohatsu Tenjin Shrine where the lovers perished. There are at least three dozen landmarks in the city from Chikamatsu's plays alone, as well as place names recognizable from many others. Take a stroll and see.

Bunraku still gives voice to the doomed lovers, faithful wives, wastrel playboys, grieving parents, honest and dishonest merchants who once walked these streets. Perhaps their spirits rest a little easier each time bunraku tells their stories.

Faith Bach　Earphone Guide

Nest Bunraku performances:
Sept.8-24 (Tokyo) and
Nov. 4-26 (Osaka)

文楽応援団　最近の活動記録　平成18年１月３日～７月29日

1/ 3 新春公演初日。鏡開き。展示解説。演目説明等。25日まで。
第8号応援団通信5000部発行。
1/ 6 住吉ロータリークラブより解説依頼。天王寺都ホテルにおいて出前解説。担当荒木、木田。
1/17 ITC北大阪より解説依頼。16名。担当藤田。
1/18 英語解説依頼。2名。担当岡持。
1/19 日本銀行情報サービス局総務企画より取材。担当安藤。
1/22 アジアプレスより解説依頼。3名。担当羽田。
1/25 千秋楽。古賀副部長より大入り袋を頂く。
1/31 「大阪まち・ひと魅力発見事業推進事業」ラウンド会議。出席木田、安藤。
2/ 4 スタッフ会議。出席7名。
2/ 9 デイリーヨミウリより電話取材。担当安藤。
2/18 第1回研修会。出席46名。新春公演総括。新団員紹介。ボランティア活動心得の話等。
2/21 関西外語専門学校より解説依頼。20名。担当大野、岡持、折井、荘司、藤田。
2/23 関西外語専門学校より解説依頼。40名。担当大野、岡持、折井、荘司。
2/28 「中之島WEST交流イベント」ラウンド会議出席。木田、安藤。
3/ 4 スタッフ会議。出席9名。
3/ 8 JR大阪駅「文楽ミニライブ」キャンペーンでチラシ配布。参加16名。
3/11 第2回研修会。出席40名。4月公演解説日程調整、模擬解説等。
3/20 「中之島WEST交流イベント」前日準備。世話人岡持、木田、安藤。
3/21 「中之島WEST交流イベント」において広報活動。チラシ配布。つめ人形参加。担当14名。
3/23 社会福祉協議会にボランティア保険加入手続き、69名分申請。
3/31 4月公演、登録証伝達式に向けて前日準備。会場設営、見台・三味線組立等。世話人荒木、稲田、岡持、木田、安藤。
4/ 1 4 月公演初日。解説員登録証伝達式。石塚支配人より授与される。出席40名。展示解説、演目説明等。23日まで。
4/13 NHK音楽伝統芸能番組「日本の伝統芸能 文楽入門」より取材。担当大野、岡持、安藤。
5/ 6 スタッフ会議。出席9名。
5/13 第3回研修会。出席40名。小ホールにて。
(午前) 4月公演総括。ビデオ鑑賞「文楽入門」「夫婦善哉」。
(午後) 第1回応援団通信編集会議。
6/ 8 茨田北小学校より解説依頼。10名。担当大野、目黒。
6/11 ユネスコ協会より解説依頼。60名。担当折井、木田、柴多、安藤。
6/13 ならシニアネットより解説依頼。30名。担当荒木、岡持、畑、安藤。
6/18 大阪市主催「文楽DAY」イベントにスタッフとして参加。11名。
6/28 第2回編集会議。
7/ 7 淀川小学校より解説依頼。23名。担当岡持、折井。
7/ 8 スタッフ会議。第3回編集会議。
7/14 高津まちづくり主催「国立文楽劇場を楽しもう」参加。
7/15 第4回研修会。夏休み公演の解説日程調整、演目の見所解説等。
7/21 夏休み公演初日。展示解説、演目説明等。8月9日まで。触れる展示に「梨割りの首」が加わる。
応援団通信第9号4000部発行。
7/29 YWCAより解説依頼。担当平石。

文楽公演

平成18年10月　地方公演スケジュール

【主催】文楽協会【後援】文化庁

世界文化遺産、人形浄瑠璃文楽。

演目【昼の部】「解説」「菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）」寺入りの段・寺子屋の段　「釣女（つりおんな）」

【夜の部】「解説」「曽根崎心中（そねざきしんじゅう）」生玉社前の段・天満屋の段・天神森の段

地方公演チケットお問合せ先

9月29日(金)	アルカイックホール・オクト	06-6487-0810
10月 1日(日)	中津川市東美濃ふれあいセンター	0573-68-8000
4日(水)	札幌市教育文化会館（大ホール）	011-261-2388
7日(土)	宇都宮市文化会館	028-634-6244
8日(日)	杜のホールはしもと	042-742-9999
9日(月)	高崎市文化会館	027-325-0681
11日(水)	山梨県立県民文化ホール(小ホール)	055-228-9131
13日(金)	名古屋市芸術創造センター	052-249-9387
10月14日(土)	(静岡) グランシップ（中ホール・大地）	054-289-9000
15日(日)	岡崎市せきれいホール(昼の部)	0564-23-7065
	(夜の部)	0564-25-0511
17日(火)	(仙台) 電力ホール	022-227-2715
19日(木)	府中の森芸術劇場 (ふるさとホール)	042-333-9999
21日(土)	千葉市文化センター(アートホール)	043-245-5961
22日(日)	前進座劇場	0422-49-0300
23日(月)	神奈川県立青少年センター	045-263-4475
25日(水)	倉敷市芸文館ホール	086-434-0010

文楽応援団通信　第９号　2006年７月21日
編集・発行　文楽応援団（年２回発行予定）
連絡先　〒542-0073　大阪市中央区日本橋1-12-10
国立文楽劇場　事業推進課
TEL06-6212-2531(代)　FAX06-6212-1202